

# カルナップ、グッドマンにおける「構成体系」について

藤田 貴也

## 本論の目的

ルドルフ・カルナップ (1891 - 1970) は、1928年に公にした『世界の論理的構築 (Der logische Aufbau der Welt)』(以下、Aufbau)において、「構成体系 (Konstitutionssystem, constructional system)」の構築を試みた。後年の自伝において、Aufbauでの試みは、あくまで試験的なものであり、出版後すぐに自分の提案した体系が他の哲学者によって改良され、より優れた新しい体系に取って代わられることを望んでいた、とカルナップは回想している。ところが残念なことに、しばらくのあいだ、そのような著作を書く者は誰も現れなかった。カルナップが当初待望していた新たな構成体系の企ては、Aufbau初版の公刊から20年以上が経過した1951年、ネルソン・グッドマン (1906 - 1998) の最初の著作、『現われの構造 (The Structure of Appearance)』(以下、SA)の出版まで待たなくてはならなかった。

本論の目的は、カルナップとグッドマンがそれぞれ最初の著作において試みた、「構成体系」の概要を明らかにすることである。そのために、第1章では、カルナップとグッドマンの記述に従って、そもそも構成体系が何であり、その目的と意義がどのようなところにあるのかについて確認する。続く第2章では、専らグッドマンの用語法に従いながら、構成体系の分類方法を概観する。最後に第3章では、AufbauとSAの構成体系それぞれの特徴について、対比しながら明らかにする。

## 1 構成体系とその目的・意義

### 1-1 構成体系とは何か

まず、カルナップのいう「構成」が何を意味するのかをAufbauの記述に従って説明しよう。カルナップは、bやcといった複数の概念をそれとは別のaという概念に置き換える操作を「構成する (konstituieren, construct)」と呼び、これとは反対にaをbとcに置き換える操作を「還元する (zurückführen, reduct)」と呼ぶ (Cf. Aufbau, § 2)。構成の具体例として、カルナップ自身は、算術を引き合いに出している。例えば、「 $3/7$ 」は「7」と「3」から構成され、「 $2/5$ 」は「2」と「5」から構成される。また、「 $3/7 > 2/5$ 」という数式であれば、「任意の自然数  $x, y$  について、 $7x=5y$  の場合、 $3x > 2y$  である」という命題に還元される。自然科学上の概念もまたこれと同じように考えられる。例えば、「加速度」が「速度

の増加」と「時間」から定義され、「速度」が「距離」と「時間」から定義されること<sup>1</sup>が挙げられるだろう。

続いて、構成体系とは何であるか、以下に引用する Aufbau 及び SA の記述の中から、それぞれ確認しよう。

#### A. Aufbau の記述

構成体系 (Konstitutionssystem) は、他の概念体系のように、諸概念を様々な仕方で分類し、それらのあいだの差異や相互の関係性を研究すること  $[\alpha]$  のみを課題とするのではない。それだけでなく、それぞれの概念にとって定められた場所を見つける諸概念の樹形図を生み出すために、諸概念を確実な基礎概念から徐々に導出すること  $[\beta]$ 、つまり「構成 (konstituieren)」することをも課題とする。(Aufbau, § 1 ※下線及び [] は引用者による。)

#### B. SA の記述

構成体系 (constructional system) において、たいていの定義は説明上の目的のために導入される。それらの定義は、いくつか他の選択肢がある中で或る定義項を選択する  $[\beta]$  という意味において、恣意的かもしれない。しかし、定義項の選択がどのようなものであれ、定義項は解釈された幾つかの語から成る複合物であり、被定義項は馴染み深く有意味な語である。そして、その定義の厳密性は被定義項と定義項の間の関係性に依存する  $[\alpha]$ 。(SA: 1 ※下線及び [] は引用者による。)

以上のように、構成体系は、(α) 諸概念の関係づけ、(β) 一定の確実性を持った基礎への還元という 2 つの要素から成り立つ。

### 1-2 構成体系の目的

構成体系とは、諸概念を何らかの基礎概念から導出することであることが分かった。それでは、構成体系の目的とは何であろうか。基礎概念から諸概念が導かれるさまを描くことによって、何を果たそうとしていたのであろうか。

#### A. Aufbau

Aufbau における構成体系の目的は、2 つ挙げられる<sup>2</sup>。それは、諸科学の基礎づけと形而上学の排除である。つまり、高度に専門分化した諸科学を統一する原理を作り上げるこ

<sup>1</sup> Cf. V. クラーフト『ウィーン学団』、寺中平治訳、勁草書房、1990年、86頁。

<sup>2</sup> Richardson, A. 1998. *Carnap's Construction of the World: The Aufbau and the Emergence of Logical Empiricism*. Cambridge: Cambridge University Press, p. 8.

と、経験に基づかないナンセンスな理論を排除するための基準を同時に示すことである。

カルナップは、形而上学の命題を記号の誤った使用に基づく混乱と見做す。本来、概念や言明は、指示対象 (*Bedeutung*) を有するべきものであるのだが、形而上学にあっては意味を有しない記号が用いられている、とカルナップは考えるのである。このような着想はもちろん、ひとりカルナップによるものではない。彼に影響を与えた先行する哲学者たちとも共通するモチーフである。ラッセルは、「哲学者たちがこれまで絶対に根本的だと考えてきた観念の中には、記号法に関する誤謬から生じたに過ぎないものがある」<sup>3</sup>と述べ、ヴィトゲンシュタインは「哲学者達の大抵の間や命題は、我々が我々の言語の論理を理解しないことに起因している (T. 4.003)」<sup>4</sup>と記している。こうした誤謬・誤解によって生じるのが形而上学の疑似命題である。

カルナップにとって無意味な疑似命題とは、検証する方法を欠いた命題である。カルナップはこれを単に偽である命題と比較して説明する。たとえば、「1910年、ウィーンの人口は六人であった。」という命題は偽であるが、無意味ではない。こうした経験的な命題に限らず、「人物Aと人物Bは互いに相手より一歳年上である。」といった矛盾命題も、アプリアリに偽となるが、無意味ではない。つまり、真でも偽でもない命題をカルナップは疑似命題と呼ぶのである。

カルナップは、構成体系において、さまざまな概念を確実な基礎から導出する一方で、基礎に還元できない命題について、検証不可能で真偽の判断が不可能な疑似命題であり、事実の記述には役に立たないものであることを指摘することによって、形而上学を克服しようと試みたのである。このように、*Aufbau* において、構成体系を作ることの目的は、諸科学の基礎づけと形而上学の排除であると言える<sup>5</sup>

## B. SA

一方、グッドマンは、構成体系の目的について、諸概念を説明するための定義の枠組みを示すことであると述べている。定義すること一般の意義については、SA発表と同じ時期(1951年)に行われた講演を基にした小論「定義と独断」の中で、述べられている。

<sup>3</sup> Russell, B.; *The Philosophy of Logical Atomism*, Routledge, London and New York, 2010[1918], p. 10 (バートランド・ラッセル『論理的原子論の哲学』高村夏輝 訳、筑摩書房 (ちくま学芸文庫)、2007年、20頁。)

<sup>4</sup> Wittgenstein, L.; *Werkaufgabe and I*, Frankfurt am Mein: Suhrkamp., 1984, p. 26. (『ウィトゲンシュタイン全集1』奥雅博訳、大修館書店、1975年、46頁。)

<sup>5</sup> 目的を果たすための方法にこそ、*Aufbau* の意義があるという意見もある。

①「私は、*Aufbau* の形式的側面に焦点を当てたい。」(Mormann, T. 2009. “New Work for Carnap’s Quasi-Analysis”, in “Journal of Philosophical Logic 38”, pp. 249 – 282.)

②「*Aufbau* において真に興味深い点は、構成体系の例を示したところではなく、構成体系を示す際の形式的な手続きにある」(Proust, J. 1989. *Questions of form, logic and the analytic proposition from Kant to Carnap*, Minneapolis: University of Minnesota Press, p. 32.)

グッドマンは、人々が独断へと陥らないようにするために、定義をすることの重要性を強調する。グッドマンによれば、人間は、その本性として、無批判的に何かを信じ、自分自身よりも誰かを偉大であると信じること、また、超自然的な力や偉大な酋長を盲目的に信用する傾向を有しているという。講演が行なわれた 20 世紀半ばという時代を考えれば、哲学上では科学的探究の手続きについての問題点が指摘され、真理を巡る様々なパラドックスが議論されていた。また、第二次世界大戦において国民を戦場へと駆り立てる数々の標語が飛び交い、戦争に熱狂する人々を多く生み出した記憶が生々しく残っていた時期でもあるだろう。グッドマンは、このような独断へと陥りやすい人の性に対し、「いずれにせよ何らかの独断しか選択できない、などという思い違いをしてはならない。私たちに選択の自由がある限り、独断ではなく定義を、ヒステリーではなく仮説を選択しよう。」(PP: 54) と、警鐘を鳴らす。このように、グッドマンは、定義について、独断と対置されるものであり、信念を無批判的に受け入れることなく、あらゆる仮説を比較し評価し続けるための役割を果たすものであると考えていた。

## 2 グッドマンによる構成体系の分類

### 2-1 構成体系の分類

「基礎」から様々な概念を「構成」することが構成体系の概要であるが、何を「基礎」とし、どのように「構成」するのか、という方法の違いに応じて、構成システムは分類することができる。グッドマンは、【表 1】の通り、体系の基礎に関して、「物理主義」対「現象主義」（「現象主義」は、さらに「個物主義」と「実在主義」に分けられる）という対立項を置き、構成の方法に関して「プラトニズム」対「唯名論」という対立項を置く。

【表 1】グッドマンによる構成体系の分類表

	体系の名称	～を基礎とする	～によって関係づける
基礎 (何から構成されるか)	物理主義 (physicalism)	物理的対象	
	現象主義 (phenomenalism) <ul style="list-style-type: none"> <li>個物主義 (particularism)</li> <li>実在主義 (realism)</li> </ul>	現象的事象 <ul style="list-style-type: none"> <li>個物 (particulars)</li> <li>性質要素 (quale, qualia)</li> </ul>	
関係 (どのように構成するか)	プラトニズム (platonism)		クラス計算 (Calculus of Classes)
	唯名論 (nominalism)		個体計算 (Calculus of Individuals)

### 2-2 何を基礎とするか（「物理主義」対「現象主義」、 「個物主義」対「実在主義」）

全く同一の体験であっても、様々な語り方で記述することができる。現象的な要素に基

づいて記述する立場が現象主義と呼ばれ、物理的要素に基づいて記述する立場が物理主義と呼ばれる。グッドマンの例を借りるならば、目撃したものを「動いている赤い一つの塊」として記述することが現象主義であり、「一羽のショウジョウコウカンチョウ」として記述することが物理主義である。

現象主義については、さらに、二つの立場に分かれる。一方は、空間的又は時間的にまとまっている具体的な個物を基礎単位とする立場であり、個物主義と名付けられる。もう一方は、具体的ではない性質的な要素を基礎単位とする立場であり、実在主義と名付けられる。

### 2-3 どのように構成するか（「プラトニズム」対「唯名論」）

グッドマンの唯名論には若干の注意が必要である。唯名論は通常、個体のみを存在物として認め、普遍（多くのものに述語づけられるもの）は真の存在物ではなく名（*nomen*）に過ぎないと見做す立場を意味する。このような意味での唯名論をグッドマンは伝統的な唯名論と呼び、自らの用いる唯名論と区別する。グッドマンの唯名論は、どのような存在物も「個体として扱う」という立場である。「個体として扱う」とは、クラス概念を用いることなく物と物の関係を記述する「個体計算（*calculus of individuals*）」を用いることを指す。反対に、クラス概念を用いる方法をグッドマンは「クラス計算（*calculus of classes*）」と呼ぶ。つまりグッドマンの用語法においては、「個体計算」を用いて構成する立場が唯名論<sup>6</sup>であり、「クラス計算」を用いて構成する立場がプラトニズムである。

「個体計算」とは全体-部分関係や重複関係を扱う論理学である。現在では、このような分野はポーランドの論理学者レスニエフスキに始まるメレオロジーという名称を当てるのが一般的であるが、グッドマン自身は「個体計算」という名称を用いていた。

ここで言われる「個体」は飽くまで専門用語であり特殊な意味で用いられていることに留意する必要があるだろう<sup>7</sup>。「個体計算」における個体とは、それ以上分割できないという字義通りの意味の *individual* とは程遠い。たとえば、一本のほうきがある場合、三つの個体が存在することになる。つまり、取っ手と刷毛とその合成物であるほうき全体である。また、何のかかわりのない物の合成物であっても一つの個体と見做される。このことをグッドマンは次のような例を出して説明する。「北極海とサハラ砂漠の砂の一边がそれぞれ一つの個体であるならば、両者の合成物は一つの個体である。」（SA: 36）つまり、個体計算

---

<sup>6</sup> グッドマン自身、このような意味で「唯名論」という語を用いたのは、SAからのようである。SAのプロトタイプに位置づけられるグッドマンの博士論文SQでは、SAの用語法における個物主義にあたるものを唯名論と呼んでいる。

<sup>7</sup> グッドマンの「個体」の用法については様々な批判がある。グッドマンは無用な混乱を避けるために、他の語（"unit"、"hunk"、"chunk"）を当てることも検討したようではあるが、最終的には、それが専門用語として用いられている以上、日常での用法とかけ離れていても致し方ないという考えに行きついたようである。（Cf. PP: 149）

における個体とは、個体計算において変項として用いられるものを指す<sup>8</sup>。

#### 2-4 基礎を選択する基準

基礎の選択に際しては、物理的対象を原始とする物理主義と現象的対象を原始とする現象主義があり、現象主義の中ではさらに、個物を原始とする個物主義と性質要素を原始とする実在主義という立場があることが分かった。それでは、哲学者は、どのようにそれぞれの立場を選択するのであろうか。

グッドマンによれば、基礎の選択は、存在論的な事実や認識論的な事実ではなく、論理学上の戦略や説明上の戦略に基づく (Cf. SQ: 33.)。つまり、物理主義者は、真に存在するものは物理的対象であるという理由で、物理主義という立場を採っているのではない。現象主義者もまた、現象的対象こそが本当に存在するからという理由で、現象主義という立場を採っているのではない。このような理由で立場を決定するのは、個別諸科学に携わる者の態度 (Cf. SQ: 32) であり、哲学者の態度ではない。哲学者は、いずれの立場を選択するにしても、自分の研究内容について体系的に説明をするうえで、適切な基礎を選択するのである。

また、以下の文からは、基礎の選択に対するプラグマティズム的姿勢が見て取れるだろう。

私の目的は、実在主義的基礎が個物主義的基礎に優越することを示すことではない。なぜならば、この二つは同じく正当な代替物である、と私には思われるからである。或る体系の利点が、別の体系の利点に勝ることは、体系の基礎ではなく、結果を調べることによって見いだされると私は考えている。(SA: 138)

このように、構成体系を構築する際の様々な立場は、それぞれの立場の基礎の堅固さではなく、そうした基礎を選択したことによって、どのような説明が可能になるか、どのような相貌が現われるか、という観点から選択される。

---

<sup>8</sup> 「個体」という言葉が選ばれていることについて、ピーター・サイモンズは次のように説明している。

「レナードとグッドマンは、自分たちのメレオロジーを「個体計算」と呼んだ。それは部分関係の項は *lowest logical type* の全てであり、クラスや関数や属性のような高位の存在物とは区別されるものであるということを強調するためであった。」(Simons, P. (1987), *Parts*, Oxford UP, p. 10.)

グッドマンが「個体」と名付けたものを、レスニエフスキはポーランド語で対象 (*object*, *Gegenstand*) を意味する “*przedmiot*” と呼んでいる。

### 3 Aufbau と SA

#### 3-1 体系の比較

Aufbau (カルナップ) と SA (グッドマン) の構成体系には、【表 2】の通り、大きく分けて次のような違いがある。一つ目は、議論を展開する上で取り上げる範囲の違いである。カルナップの構成体系は基礎から知覚的对象、物理的对象、(他者) 心理的对象、さらには文化的対象の構成までも視野に入れた射程の広いものである。それに対してグッドマンの構成体系はこれよりもずっと狭く、知覚的对象のみをその範囲としている。二つ目は、体系の基礎である。Aufbau は、個物を原子とする個物主義の体系であり、課題となるのは、個物から性質を定義すること (抽象化の問題) である。SA は、場所、時間、(視覚的对象を議論する場合は) 色から成る性質要素 (quale, qualia) を原子とする実在主義の体系であり、課題となるのは、性質要素から個物等の具体的なものを定義すること (具体化の問題) である。三つ目は、体系を構成する方法の違いである。カルナップは、抽象化の問題に取り組むために、類似している個物のクラスを抽出するという方法で体系を構成する。それに対し、グッドマンは、或る特定の場所に或る特定の時間に性質が現われることを性質が具体化することと捉え、(場所、時間、色等の) 性質要素が共在している状態を記述することによって、体系を構成する。

【表 2】 Aufbau と SA の体系比較表

		Aufbau (カルナップ)	SA (グッドマン)
(1) 範囲	1、現象的領域	○	○ (esp. 視覚領域)
	2、物理的領域	○	×
	3、心理的領域	○	×
(2) 基礎	名称	個物主義	実在主義
	原子	要素経験 (Elementarerlebnis)	性質要素 (quale, qualia) 場所、時間、色
	課題	抽象化の問題 (the problem of abstraction)	具体化の問題 (the problem of concretion)
(3) 構成	名称	プラトニズム (クラス計算)	唯名論 (個体計算)
	関係	類似性 (Ähnlichkeit, resemblance, /similarity) ↓ 対称的・反射的・推移的、二項述語	共在性 (togetherness) ↓ 対称的・非反射的・非推移的、二項述語

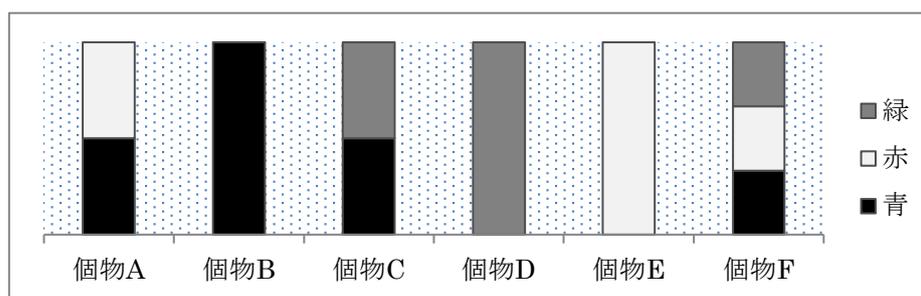
<sup>9</sup> 「性質要素」及び「共在性」という訳語は、以下の論文に従った。松本晋「アメリカにおける論理実証主義とその批判的受容」(神野慧一郎編『現代哲学のバックボーン』、勁草書房、1991年、169-192頁所収)。

### 3-2 Aufbau の構成 (個物主義+プラトニズム)

個物主義システムを採用するカルナップが取り組まなければならなかったことは、個物から性質を導き出す「抽象化の問題」であった。この問題に対してカルナップは、類似している個物のクラスを抽出するという方法で臨んだ。

以下の条件 1 は、三つの性質と六つの個物が存在する世界をモデル化したもの<sup>10</sup>である。このモデルでは性質として緑、赤、青の三種類の色が選ばれている。ここでの課題は、色に関する概念を持たない状態で、6つの個物の部分的な類似性関係から3種類の色を定義することである。

#### 【条件 1】



まずは、これら6つの個物の中で類似しているペアをすべて抽出する。たとえば、個物 A は、自分自身、個物 B、C、E、F と類似しており、個物 B は自分自身、個物 A、C、F と類似している。このように個物間の部分的な類似性に着目しながらペアを抽出すると次のようなリストが出来上がる。

#### 【STEP1】 類似しているペアのリスト

(A, A), (A, B), (A, C), (A, E), (A, F), (B, B), (B, C), (B, F)  
(C, C), (C, D), (C, F), (D, D), (D, F), (E, E), (E, F), (F, F)

ここで、類似性が推移的な関係であることを思い出そう。上のリストをもとに、推移的な関係が満たされるようにそれぞれの個物を配置し直すと次のように三つの集合が形成される。

#### 【STEP2】 類似性の集まり (Ähnlichkeitskreis, similarity circle)

{A, B, C, F} → 青、{A, E, F} → 赤、{C, D, F} → 緑

<sup>10</sup> この例はグッドマン自身が挙げた例 (Cf. SA: 115) と同じであるが、視覚化して説明するアイデアは Cohnitz, D. & M. Rossberg, 2006. *Nelson Goodman*, Chesham: Acumen. に負っている。

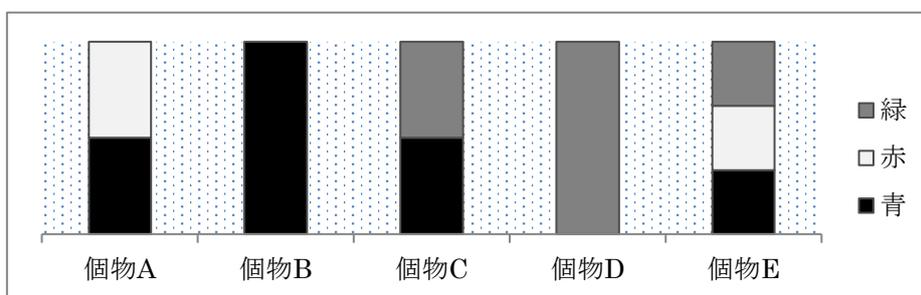
一つ目の集合に属す個物 A、B、C、F は青という性質を、二つ目の集合に属す個物 A、E、F は赤という性質を、三つ目の集合に属す個物 C、D、F は緑という性質を共通して持っていることが分かる。このように、類似性という原始関係から抽出された集合は、それぞれの共通する性質に分類されている。これらの集合は、カルナップが「類似性の集まり」と呼ぶものであり、性質と同一視できるものとなる。

しかし、この方法はうまくいくことばかりではない。次の二つの事例では、性質と同一視することのできる「類似性の集まり」を作ることが出来なくなる。

### ①同伴性の難題 (companionship difficulty)

以下の条件2においては、赤という性質を有する個物は、いずれも青という性質を同時に有している。そのため、赤という性質のみを有する類似性の集まりを形成することができない。

#### 【条件2】



#### 【STEP1】類似しているペアのリスト

(A, A), (A, B), (A, C), (A, E), (B, B), (B, C), (B, E), (C, C), (C, D), (C, E),  
(D, D), (D, E), (E, E)

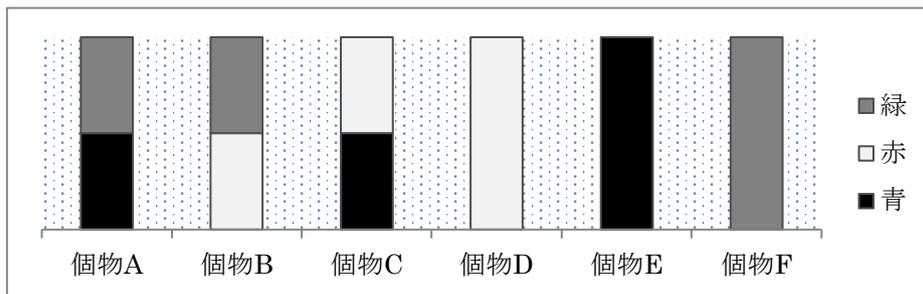
#### 【STEP2】類似性の集まり

{A, B, C, E} → 青、{C, D, E} → 緑  
※赤を抽象できない！

### ②不完全共同体の難題 (difficulty of imperfect community)

以下の条件3においては、個物A、個物B、個物Cは、どれも互いに類似しているため、類似性の集まりを形成する。ただし、三者に共通する性質を有していないため、何らかの性質と同一可能なクラスではない。

### 【条件3】



### 【STEP1】 類似しているペアのリスト

(A, A), (A, B), (A, C), (A, E), (A, F), (B, B), (B, C), (B, D), (B, F)  
(C, C), (C, E), (D, D), (E, E), (F, F)

### 【STEP2】 類似性の集まり

{B, C, D} → 赤、{A, C, E} → 青、{A, B, F} → 緑  
{A, B, C} → ?!

### 3-3 SAの構成（実在主義+唯名論）

実在主義システムを採用するグッドマンが取り組まなければならなかったことは、性質要素から導き出す「具体化の問題」であった。性質要素とは、現象の流れを分割して得られる最小の具象体（concretum）を、さらに分割して得られる構成要素であり、「場所」、「時間」、「色（性質）」が該当する。具体化させるためには、具体的部分の構成要素が同時に揃っている必要がある。つまり、SAの構成体系の課題は、「場所」と「時間」と「色」が、一緒に存在する（共在する）モデルを描くことである。

カルナップが、個物を抽象化させるために、「類似性」という対称的・反射的・推移的な二項述語を原始述語として体系に導入したが、グッドマンは、性質を具体化させる作用を持つ述語として、「共在性（togetherness）」という対称的・非反射的・非推移的な二項述語を原始述語として体系に導入する。共在関係は、色とその色が現われる時間との間、又は、色とその色が現われる場所との間に成立する関係である。

グッドマンは、まず、共在関係にある二つの諸性質要素から成るクラスを作る述語 Wh（記号は with に由来する）による構成を試みる。具象体を構成するためには、同一の具象体に属する三つの性質要素が共在している必要がある。「色 c、場所 d、時間 f について、c が d と共在しており、且つ、c が f と共在しており、且つ、d が f と共在している。」を

意味する以下の式は、一見して、この条件を満たしているように見える。

$$\text{Wh } c, d \wedge \text{Wh } c, f \wedge \text{Wh } d, f$$

この段階では、具象体が構成できたかどうか定かではない。なぜならば、 $c$ が $d$ に現われるのは $f$ 以外の何らかの他の時間である可能性や、 $c$ が $f$ に現われるのが $d$ 以外の他の場所である可能性も残されているからである。このことについて、 $c$ 、 $d$ 、 $f$ をそれぞれ「退役軍人」、「真珠湾」、「日本軍による攻撃時」に置き換え、次のように説明する。

「私は真珠湾で米軍と一緒に居り、且つ、日本軍による攻撃時に米軍と一緒に居た」と主張する退役軍人は、たとえ彼が、真珠湾攻撃時にポカテロ〔米・アイダホ州の都市〕にて米軍と一緒に居り、1945年に真珠湾にて米軍と一緒に居たとしても、嘘をついているわけではない。(SA: 147 ※ [] は引用者による。)

或るクラスがいずれの諸性質要素も共在関係にあるペアから形成されていたとしても、そのことで以て、何らかの一つの具象体に属しているということを保証するわけではない。つまり、クラス計算を用いる述語  $\text{Wh}$  では、カルナップが直面した「不完全共同体の難題」と同じ課題に直面することになるのである。

「不完全共同体の難題」に陥らずに、実在主義の構成体系を構築するために、グッドマンは述語  $\text{W}$  ( $\text{Wh}$  と同様、 $\text{with}$  に由来する) を導入する。述語  $\text{W}$  は、共在関係にある二つの諸性質要素の和を作る述語であり、体系上隔離的 ( $\text{discrete}$ ) である個体に適用される。また、 $\text{Wh}$  にはない特徴として、性質要素の間だけではなく、性質要素の和に対しても適用することが可能である。このような特徴を持つ述語  $\text{W}$  によって、同一の具象体に属する三つの性質要素  $c$ 、 $d$ 、 $f$  が共在している状態について、「 $\text{W } c, d + f$ 」と表現される。このように、個体計算を構成体系の構築に用いることで、グッドマンは、「不完全共同体の難題」を回避しながら実在主義的な体系の構築を試みたのである。

本稿の目的は、分析哲学界に大きな影響を及ぼしたカルナップとグッドマンが、それぞれの哲学的キャリアにおける最初期に取り組んだ「構成体系」の概要を明らかにすることであった。カルナップの体系とグッドマンの体系を比較すると、基礎及び構成方法という点で正反対にあることが分かる。カルナップの  $\text{Aufbau}$  から多くを学びながら、いかにしてそれを乗り越えていくのか苦闘しているグッドマンの姿が、この点からも見て取れるだろう。

## 参考文献一覧

### グッドマンの著作

グッドマンの著作からの引用・参照については、以下の略号を用い、その頁数を算用数字で示して本文中に挿入する。

SQ: *A Study of Qualities*, New York: Garland, 1990[1940].

SA: *The Structure of Appearance* 3rd edition, Boston, MA: Reidel, 1977 [1951].

PP: *Problems and Projects*, Indianapolis, Bobbs-Merrill, 1972.

### その他の参考文献

Carnap, R. 1961[1928]. *Der logische Aufbau der Welt, Scheinprobleme in der Philosophie*. Hamburg: Meiner.

Cohnitz, D. & M. Rossberg, 2006. *Nelson Goodman*, Chesham: Acumen.

V. クラフト『ウィーン学団』、寺中平治訳、勁草書房、1990年

松本晋「アメリカにおける論理実証主義とその批判的受容」(神野慧一郎編『現代哲学のバックボーン』、勁草書房、1991年、169 – 192頁所収)。

Mormann, T. 2009. “New Work for Carnap’s Quasi-Analysis”, in “Journal of Philosophical Logic 38”, pp. 249 – 282.

Proust, J. 1989. *Questions of form, logic and the analytic proposition from Kant to Carnap*, Minneapolis: University of Minnesota Press.

Richardson, A. 1998. *Carnap’s Construction of the World: The Aufbau and the Emergence of Logical Empiricism*. Cambridge: Cambridge UP.

Russell, B. 2010[1918] *The Philosophy of Logical Atomism*, Routledge, London and New York. (バートランド・ラッセル『論理的原子論の哲学』高村夏輝 訳、筑摩書房(ちくま学芸文庫)、2007年。)

Simons, P. (1987), *Parts*, Oxford UP.

Wittgenstein, L. 1984. *Werkaufgabe I*, Frankfurt am Mein: Suhrkamp. (『ウィットゲンシュタイン全集1』奥雅博訳、大修館書店、1975年。)